第５学年「国語」学習指導案

授業者　岡田　博元

２月２３日（金）４階Ａ室　９：００～９：４０

１　単元名　　この作品を追求するなら　「この日ぼくが考えたこと」ほか（「小学五年生」重松清より）

単元目標	○既習の読みの観点を用いて，作品中の表現を意味づける ○互いの読みを聴き合い，作品の要点を意識して考えを交流する

２　単元について

５年生は言葉を介して自分とは離れた世界を想像し，書かれたことから意味をみつけ，作品全体から作者の意図を感じる読み方ができるようになってくる。この変化を山元（2005）[*1] は「物語内容駆動の読みから要点駆動の読みへ」と表している。これは中学まで続く変化の始まりであり，すぐ全員に変化があるわけではない。しかし，交流をとおして刺激された子どもたちの認識は，次の読みにつながり，少しずつ個々の読みをひらいていく。この変化を，知的な喜びとして実感できるような単元を構想した。

その方法として，８週にわたり，週２～３時間を読むことの時間に当てる帯単元の実践（リーディング・ワークショップ，以下R･W）を行ってきた。R･Wでは，子どもを成長していく一人の読み手として捉え，「読みの観点」を用いて一人一人が作品に向き合う時間を確保する。興味の対象となる文章表現を見出し，それについての解釈をグループで交流する過程で，自分の読みを立体的にしていく。

毎時間の授業は，前半に子どもたちの反応をもとにした発表を行い，作品の要点に関わる表現について対話する場をもつ。そして後半に，考えたことを生かしながら一人一人が作品に向かう場面を設ける。作品に向かい，個々の読書ノートを仕上げていく過程は個別指導を中心にするが，学び合いができるよう，個々の関心による学習ペアや学習グループを設定する。

本単元では，作品構造や細部の表現に着目するために，字のない絵本「漂流物」で文章全体を概観する「出来事マップ」作りを経験する。そして，小学生が「幸せ」について考える「その日ぼくが考えたこと」をメインテキストに，作者や作風を関連付けて考えられる副教材を示しながら，子どもたち自身が「幸せ」を感じる物語を持ち込んでくる言語環境をつくることで，読みの観点の自覚化を図りたい。

単元後半では，これまでの読みで考えたことを生かして「その日ぼくが考えたこと」を読んでいくこととする。作者の仕かけを意識しやすいものとして本作を選んだ。大切にしたいのは，他の作品や他者の読みに触れることで，自分になかった読み方を自覚し，それを取り入れようとすることである。それぞれが「今の自分」を意識しながら読みを更新できる授業について，個の活動と他者の声を通して考えたい。

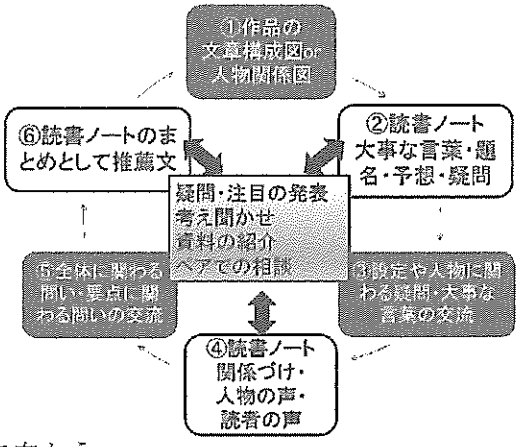
３　学習指導計画（帯単元　１３時間目／全１６時間）

（１）「漂流物」を読み出来事マップを作る。　２時間

（２）作品群から選び，出来事マップを作る。　３時間

（３）読みの観点をもとに読書ノートをつくる。
　　読みを交流し，解釈の仕方を話し合う。　※２作品で
　　自分の読みを読書ノートにまとめる。本時７／９時間

（４）作品から学べることを推薦文にまとめる　２時間



４　本時

（１）本時のねらい

友だちの読みから注目したところを見つけ，自分の作品に向かう

（２）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
１　友だちの発表を聞く　○読み手がもう少し考えたいこと	・読みの観点を利用して立ち止まる
２　作品の要点を考える　○筆者の表し方にふれる	・作品の要点にふれる ・書き方の工夫を取り上げる
３　自分の作品に向かう　○計画に沿って個人で進める	・学習ペアに相談する

[*1] 山元隆治（2005）「文学教育基礎理論の構築」より